

氏名	姜 成山 (キョウ セイサン)
本籍	中華人民共和国
学位の種類	博士 (学術)
学位の番号	博士 第71号
学位授与の日付	2014年9月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	渤海王国の社会と国家 — 在地社会有力者層の検討を中心の一

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	町 田 隆 吉
	(副査) 桜美林大学教授	太 田 哲 男
	桜美林大学教授	倉 澤 幸 久
	早稲田大学教授	渡 邊 義 浩

論文審査報告書

論文目次

序 章	1
第1節 先行研究と問題の所在	1
第2節 研究の視点、方法、本論文構成.....	10
第1部 文献史料からみた渤海王国の社会と国家	
第1章 在地諸種族からみた渤海王国の時期区分.....	18
第1節 文献史料にみる渤海王国の在地諸種族.....	18
第2節 時期区分.....	27

第2章 渤海王国の前期における在地社会の有力者層	30
第1節 『類聚国史』の「渤海沿革記事」.....	30
第2節 渤海王国の「首領」に関する先行研究.....	32
第3節 『類聚国史』渤海沿革記事主要語句の分析.....	36
第4節 渤海王国の前期における首領の解釈.....	39
第3章 渤海王国の後期における在地社会の有力者層	49
第1節 咸和十一年渤海王国中台省牒に関する先行研究.....	49
第2節 咸和十一年渤海王国中台省牒の釈文.....	50
第3節 渤海王国の後期における在地社会の有力者の動向.....	52
第2部 考古学資料からみた渤海王国の社会と国家	
第4章 渤海王国の考古学資料	60
第1節 渤海王国に関連する遺跡.....	60
第2節 渤海墳墓の分析指標.....	62
第5章 六頂山墳墓群の検討	77
第1節 六頂山墳墓群の立地と発掘調査の経緯.....	77
第2節 六頂山墳墓群の先行研究.....	80
第3節 六頂山墳墓群の年代.....	85
第4節 墳墓構造とその分布.....	86
第5節 葬送習俗.....	91
第6節 出土遺物の検討.....	92
第7節 六頂山墳墓群よりみた在地社会.....	103
第6章 虹鱒魚場墳墓群の検討	108
第1節 墳墓の概要—立地、構造、埋葬形態—.....	108
第2節 出土遺物による墳墓の編年.....	113
第3節 他の出土遺物の検討.....	116
第4節 虹鱒魚場墳墓群よりみた在地社会.....	124
第7章 チェルニャチノ5渤海墳墓群の検討	127
第1節 史料による「率賓府」の様相.....	127
第2節 チェルニャチノ5渤海墳墓群の概要.....	128
第3節 チェルニャチノ5渤海墳墓群の年代および墳墓分布.....	130
第4節 遺物の埋葬様相.....	134
第5節 渤海率賓府の一在地社会.....	139
第8章 王室墓と非王室墓の特徴	145
第1節 王室墓の特徴.....	145
第2節 非王室墳墓の特徴.....	149
終章	153
第1節 結論.....	153

第2節 課題	156
付表・付図	158
参考文献	-1-

論 文 要 旨

本論文は、698年～926年まで東北アジアに存在した渤海王国の社会と国家の特質について在地社会とその有力者層に焦点をあて、文献史料と考古学資料といった異なるふたつの方面から解明しようとしたものである。全体は、序章、第1部（第1章～第3章）、第2部（第4章～第8章）、終章及び付表・付図、参考文献から構成される。このうち、序章では渤海王国に関する日本、中国、韓国、ロシアなどにおける従来の研究を整理し、その研究の多くが国民国家という枠にとらわれていたこと、中央一周縁という構造の研究視点から論じられる傾向にあったこと、文献史料と考古学資料のいずれか一方に重点をおいて研究が進められてきたことなどが指摘される。こうした状況をふまえて、在地社会とその有力者層の動向から渤海王国の社会と国家を検討する必要性が主張され、文献史料だけでなく考古学資料からの検討も重視すべきだと述べる。

第1部では文献史料にもとづく検討がおこなわれる。第1章では渤海王国に関する文献史料から、在地社会の動向を中心に時代区分を試み、第2章では『類聚国史』渤海沿革記事から、渤海王国の前期においては在地社会の有力者層に都督・刺史・首領の官職をあたえ、その部落民に対する支配秩序を温存したまま地方支配を進めたとする。第3章では「中台省牒」の検討をとおして渤海王国後期に在地社会が王国に統合されたことを確認する。その後は王国の衰退にともない在地社会の独自の活動が頻繁に再開されたとし、渤海王国の時代をとおして在地社会の独自性、自立性は維持され、それが王国を下からささえ続けたとされる。

第2部では考古学資料からの検討がなされる。第4章では渤海王国に関する考古学資料の概要を述べ、在地社会の様相を明らかにするため墳墓群資料を取りあげ、墳墓形態、埋葬習俗、副葬品を中心に先行研究をふまえて緻密な整理を進めている。そうした作業をもとに、第5章では渤海王国前期の六頂山墳墓群を検討し、靺鞨社会と高句麗社会の要素が融合する壙室墓を営む在地社会の存在が明らかにされ、第6章では渤海王国後期の虹鱒魚場墳墓群のほとんどが壙室墓であること、さらに墳墓に埋納された文物の検討をとおして当該時期の在地社会の有力者層の存在が確認される。第7章では渤海王国の率賓府で造営されたチェルニャチノ5墳墓群を検討し、辺境の在地社会でも渤海王国の墓制が取り入れられるようになっていたことを明らかにした。なお、いずれの墳墓群からも墳墓形態、副葬品などから当該在地社会の有力者層を確認しており、第8章で王室墓と比較することによって在地社会の有力者層の存在形態をあらためて浮き彫りにした。

終章では、文献史料の研究から、在地社会の有力者である「首領」層は渤海王国に次第に統合されていったが、靺鞨の一部には最後まで独自性を維持する勢力も存在していたことにふれる。また、考古学資料（墳墓群資料）の研究から、当初、独自の文化要素を保っていた在地社会の墓制は、渤海王国の発展にともない融合しながら波及していったが、王室墓とは峻別されていたとする。また、渤海王国前期の六頂山墳墓群、同じく後期の虹鱒魚場墳墓群、さらに前期から後期にかけて造営された辺境のチェルニャチノ5墳墓群における墳墓形態、靺鞨罐の埋納の有無などの検討から、王国による在地社会の統合は、文化的融合をとまっていたと結論づける。ただし、それは在地社会の文化的独自性を容認しつつ進められたと推測する。こうした在地社会の独自性が渤海王国を支えており、それゆえ王国の衰退に際して在地社会が自立する基礎になったと考える。最後に文献史料と考古学資料に基づく在地社会の更なる解明の必要性を課題としている。

論文審査要旨

本論文は、渤海王国に関する国内外における従来の研究を整理し、その問題点を明らかにすることにより、自らの方法論を組み立て、さらに自らに課した問題を一定程度解決している。これらの点は、当該分野における現在の研究水準を満たしており、将来自立した研究活動が期待される研究といえる。とりわけ渤海王国に関する従来の研究が、国民国家という枠にとらわれていたことを指摘し、在地社会の重要性に関心を注ぎ、在地社会の側から王国を眺望しようとする視座、そのための方法論として考古学資料の検討を重視することは独創性が高いといえる。また、本論文のなかでは、文献史料、考古学資料を収集・整理したうえで、図・表が丹念に作成されており、これらが本論文の構成上、不可欠な重要なものであることはいうまでもなく、今後、当該分野の研究を進める上で貴重なデータが整えられたとあってよい。この点も高く評価される。くわえて在地社会の定義や研究方法も明確で優れている。ただし、論文構成からも明らかのように、文献史料と考古学資料といったふたつのアプローチのうち、考古学資料からのアプローチは充分であるが、史料的制約もあって文献史料からの検討が少ないことは、今後の研究課題として残るであろう。このように課題は残されているが、本論文は課程博士論文として評価できる要件を満たしており合格と判断できる。

口頭審査要旨

最終審査では、学位請求申請者により当該論文の概要説明がおこなわれ、それに対して審査委員から質問と意見がよせられた。文献史料に関する研究では、「首領」層の検討で取りあげられた『類聚国史』と渤海使節が日本にもたらした外交文書「中台省牒」は史料レベルとして同じように扱えるか否か、また前者にみえる「土人」とは具体的に高句麗系で

あるのか否か、さらに高句麗人と靺鞨人が連合して樹立したとされる渤海王国の連合の質とはどのようなものと考えられるかなどの質問が出された。また考古学資料にかかわる研究では、六頂山墳墓群で王室墓と在地社会の有力者層の墳墓とが比較的近いところに営まれているが、こうした状況から両者の関係はどのようなものと考えられるか、あるいは王室墓の構造や副葬品などから渤海国王は高句麗系であるのか否かなどの質問が出された。これらの質問に対して、申請者は史料的制約のある文献史料に関連するものも含めて自らの研究の到達点をふまえて回答がなされた。その内容は、文献史料、考古学資料のいずれの場合も、現時点での当該分野の研究水準に達しているものと見なすことができる。

したがって、本論文について審査員は課程博士論文として合格であると判定した。